

図 2-1 住民見守りができないと思うもの(地域特性別) (n=121 複数回答)

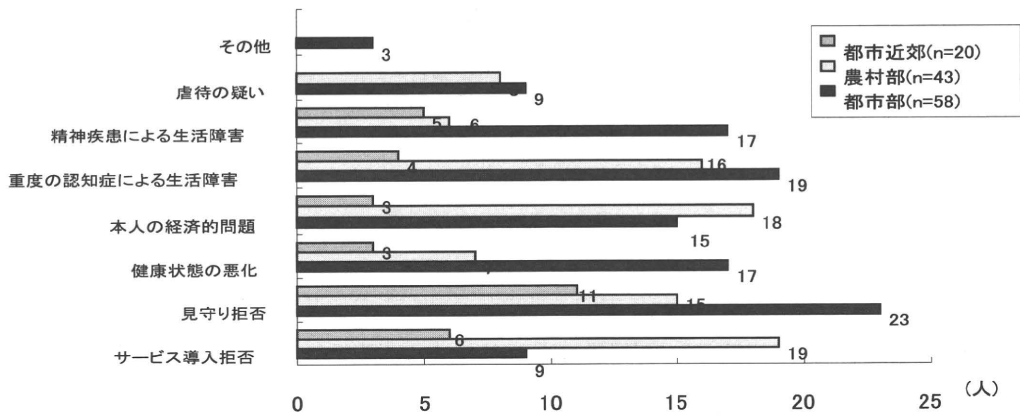
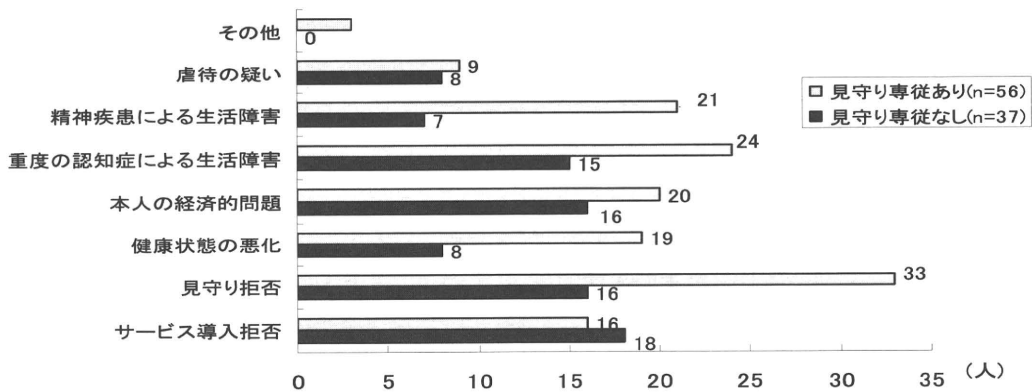


図 2-2 住民見守りができないと思うもの(見守り専従の有無別) (n=121 複数回答)



「住民見守りネットワーク組織を充実させるために何が必要だと思いますか」については、都市部では、「相談活動」が最も多く、次いで「交流の場の開催」であった。農村部では、「見守り活動」が最も多く、次いで地域の連携・体制づくりであった。都市近郊では、「地域の高齢者の実態把握」が最も多く、次いで「見守り活動」であった(図 1-1)。

見守り専従の有無では、見守り専従ありの地域で、「保健・医療・福祉の情報提供」が最も多く、次いで「相談活動」、「見守り活動」であった。見守り専従なしの地域では、「相談活動」が最も多く、次いで「交流の場の開催」、「地域の高齢者の実態把握」であった(図 1-2)。

「住民見守りはどこまでできると思うか」については、地域特性別では特徴がみられた。都市近郊では、「同じ町内」が最も多かったのに対し、都市部および農村部では「マンション等の同じ敷地内」が最も多かった(図 2-1)。見守り専従の有無別では、見守り専従あり地域では「マンション等同じ敷地内」が最も多く、見守り専従なしの地域では「同じ町内」が最も多かった(表 5-1,2)。また、「住民見守りができないと思うもの」では、地域特性別では、都市部と都市近郊で「見守り拒否」が最も多かったが、農村部では、「本人の経済的問題」が最も多かった。「サービス導入拒否」は、農村部と都市近郊で 2 番目に多かった。都市部でのみ見られた項目は、「健康状態の悪化」であった(図 2-1)。さらに、見守り専従の有無別では、見守り専従ありの地域で、「見守り拒否」が最も多く、次いで「重度の認知症による生活障害」であった。見守り専従なしの地域は、「サービス導入拒否」が最も多く、次いで「本人の経済的問題」であった(図 2-2)。

表 6-1 平成 20 年度と平成 22 年度 見守り対象者の有無(地域特性別)

		平成20年度				平成22年度				
地域特性		いる	いない	無回答	計	地域特性	いる	いない	無回答	計
見守り対象者の有無	都市部 (n=407)	人数 302	82	23	407	都市部 (n=68)	人数 57	7	4	68
		% 74.2	20.1	5.7	100.0		% 83.8	10.3	5.9	100.0
	農村部 (n=113)	人数 69	39	5	113	農村部 (n=48)	人数 30	16	2	48
		% 61.1	34.5	4.4	100.0		% 62.5	33.3	4.2	100.0
	都市近郊 (n=83)	人数 45	36	2	83	都市近郊 (n=36)	人数 16	14	6	36
		% 54.2	43.4	2.4	100.0		% 44.4	38.9	16.7	100.0

表 6-2 平成 20 年度と平成 22 年度 見守り対象者の有無(見守り専従の有無別)

		平成20年度				平成22年度				
見守り専従の有・無		いる	いない	無回答	計	見守り専従の有・無	いる	いない	無回答	計
見守り対象者の有無	見守り専従なし (n=291)	人数 168	105	18	291	見守り専従なし (n=46)	人数 30	15	1	46
		% 57.7	36.1	6.2	100.0		% 65.2	32.6	2.2	100.0
	見守り専従あり (n=309)	人数 248	52	9	309	見守り専従あり (n=106)	人数 73	22	11	106
		% 80.3	16.8	2.9	100.0		% 68.9	20.8	10.4	100.0

平成 20 年度と平成 22 年度で見守り対象者数をみると、地域特性別では、都市部と農村部で「見守り対象者がいる」と答えた人の割合は増加していたが、都市近郊では減少していた(表 6-1)。見守り専従の有無別では、見守り専門職ありの地域では平成 20 年度に比べて平成 22 年度は、「見守り対象者がいる」と答えた人の割合は減少していた(表 6-2)。

2. 見守りチェックリストの有効性

1) 本年度の見守りチェックリストの結果および平成 21 年度と 22 年度の比較

見守り対象者の内訳は、平成 21 年度は、計 334 部、平成 22 年度は、計 103 部であった。分析は、「対象者の状態」、「生活の様子」、「観察・会話による項目」、「認知症を疑うサイン」、「うつ状態」の該当人数について、平成 21 年度と平成 22 年度で比較した。

見守り対象者は、表 1 のとおりであった。平成 21 年度は、都市部 K 市 111 人、都市部 S 市 97 人、農村部 44 人、都市近郊 82 人、計 334 人であった。平成 22 年は、対象者数が少なかったため、都市部 K 市と S 市をあわせて集計した。都市部(K 市、S 市)48 人、都市近郊 55 人、計 103 人であった。「世帯の状況」は、平成 21 年度は都市部(K 市)、見守り専従ありの地域で多かった。平成 22 年度は、都市部(K 市、S 市)、見守り専従なしの地域で多かった。「身体の不自由の有無」では、「身体不自由あり」は、平成 21 年度と 22 年度において、都市近郊、見守り専従なしの地域で多かった。「緊急連絡先の有無」では、平成 21 年度は、農村部、見守り専従ありの地域で「緊急連絡先なし」、「わからない」、「無回答」が多かった。平成 22 年度は、都市近郊、見守り専従ありの地域で「連絡先なし」、「わからない」、「無回答」が多かった。「緊急連絡先」としては、「子」が最も多く、連絡先不明が多かったのは、平成 21 年度は、都市部(S 市)、見守り専従なしの地域で多く、平成 22 年度は、都市近郊、見守り専従ありの地域で多かった。平成 22 年度のみ項目は、「経済状態」、「移動手段」であった。「経済状態」は、都市部、見守り専従ありの地域で「無回答」が多かった。移動手段は、歩行が最も多かった。杖や車椅子が多かったのは、都市部、見守り専従ありの地域であった(表 1)。

表1 見守り対象者の状態(平成22年度 n=103、平成21年度 n=334)

項目	平成22年度					平成21年度						
	一人暮らし (%)	高齢夫婦 (%)	子と二人の世帯 (%)	家族と同居 (%)	無回答 (%)	一人暮らし (%)	高齢夫婦 (%)	子と二人の世帯 (%)	家族と同居 (%)	無回答 (%)		
世帯の状況	都市部(K市、S市n=48)	89.6	4.2	0.0	4.2	2.0	都市部(K市n=111)	83.8	4.5	1.8	0.0	9.9
	都市近郊(n=55)	72.7	9.1	3.6	9.1	5.5	都市部(S市n=97)	53.6	11.3	6.2	12.4	15.5
							農村部(n=44)	68.2	6.8	11.4	9.1	0.0
							都市近郊(n=82)	67.1	17.0	8.5	3.7	3.7
	見守り専従なし(n=45)	84.5	6.7	0.0	4.4	4.4	見守り専従なし(n=184)	64.1	9.8	6.5	8.7	9.2
見守り専従あり(n=58)	77.6	6.9	3.4	8.6	3.4	見守り専従あり(n=150)	74.7	10.0	5.3	2.0	8.0	
身体不自由の有無		なし (%)	あり (%)	無回答 (%)				なし (%)	あり (%)	無回答 (%)		
	都市部(K市、S市n=48)	70.8	16.7	12.5			都市部K市(n=111)	77.5	19.8	2.7		
	都市近郊(n=55)	58.2	40.0	1.8			都市部(S市n=97)	61.9	25.8	12.3		
							農村部(n=44)	61.4	25.0	13.6		
							都市近郊(n=82)	65.9	34.1	0.0		
見守り専従なし(n=45)	64.4	33.3	2.2			見守り専従なし(n=184)	62.0	28.3	9.7			
見守り専従あり(n=58)	63.9	25.8	10.3			見守り専従あり(n=150)	75.3	22.7	2.0			
緊急連絡先の有無		なし (%)	あり (%)	わからない (%)	無回答 (%)			なし (%)	あり (%)	わからない (%)	無回答 (%)	
	都市部(K市、S市n=48)	2.1	62.5	8.3	27.1		都市部(K市n=111)	2.7	45.1	22.5	29.7	
	都市近郊(n=55)	10.9	65.5	0.0	23.6		都市部(S市n=97)	7.2	50.5	7.2	35.1	
							農村部(n=44)	9.1	31.8	45.5	13.6	
							都市近郊(n=82)	0.0	57.3	8.5	34.1	
見守り専従なし(n=45)	6.7	73.3	0.0	20		見守り専従なし(n=184)	6.0	51.1	16.8	26.1		
見守り専従あり(n=58)	8.6	56.8	6.9	27.6		見守り専従あり(n=150)	2.0	44.0	18.7	35.3		
緊急連絡先の高齢者との関係		兄弟 (%)	子ども (%)	親類 (%)	その他 (%)	無回答 (%)		兄弟 (%)	子ども (%)	親類 (%)	その他 (%)	無回答 (%)
	都市部(K市、S市n=48)	11.4	48.6	5.7	2.9	31.4	都市部(K市n=111)	8.0	68.0	14.0	0.0	10.0
	都市近郊(n=43)	4.7	41.9	4.6	2.3	46.5	都市部(S市n=97)	2.0	32.7	0.0	6.1	59.2
							農村部(n=44)	71.4	0.0	21.4	7.1	0.0
							都市近郊(n=82)	6.4	70.2	2.1	6.4	14.9
見守り専従なし(n=36)	5.5	61.1	5.6	2.8	25.0	見守り専従なし(n=184)	4.3	50.0	4.3	3.3	35.1	
見守り専従あり(n=42)	9.5	31.0	4.8	2.4	52.3	見守り専従あり(n=150)	6.0	67.7	10.6	1.5	12.1	
経済状態		なし (%)	あり (%)	わからない (%)	無回答 (%)			なし (%)	あり (%)	わからない (%)	無回答 (%)	
	都市部(K市、S市n=48)	39.6	4.2	0.0	56.2		都市部(K市n=111)	—	—	—	—	
	都市近郊(n=55)	47.3	1.8	7.3	43.6		都市部(S市n=97)	—	—	—	—	
							農村部(n=44)	—	—	—	—	
							都市近郊(n=82)	—	—	—	—	
見守り専従なし(n=45)	51.1	2.2	4.4	42.2		見守り専従なし(n=184)	—	—	—	—		
見守り専従あり(n=58)	37.9	3.4	3.4	55.2		見守り専従あり(n=150)	—	—	—	—		
移動手段		歩行 (%)	杖 (%)	車椅子 (%)	その他 (%)	無回答 (%)		歩行 (%)	杖 (%)	車椅子 (%)	その他 (%)	無回答 (%)
	都市部(K市、S市n=48)	54.2	14.6	6.3	2.1	22.9	都市部K市(n=111)	—	—	—	—	—
	都市近郊(n=55)	47.3	1.8	0.0	7.3	43.6	都市部(S市n=97)	—	—	—	—	—
							農村部(n=44)	—	—	—	—	—
							都市近郊(n=82)	—	—	—	—	—
見守り専従なし(n=45)	46.7	22.2	4.4	4.4	22.2	見守り専従なし(n=184)	—	—	—	—	—	
見守り専従あり(n=58)	50.0	15.5	3.4	0.0	31	見守り専従あり(n=150)	—	—	—	—	—	

表 2-1 生活の様子で「はい」と答えた人数(地域特性別)

項 目	平成22年度			平成21年度		
	都市部 (K市、S市 n=48)	都市近郊(n=55)	K市(n=111)	S市(n=97)	農村部 (n=44)	都市近郊 (n=82)
ポストの郵便・新聞、雨戸閉まりっぱなし	0	2	2	7	0	2
家や家周囲の散らかり	2	0	2	9	3	1
家の明かりがつかない	0	1	1	2	6	2
通院している様子が無い	0	0	1	11	1	4
どなり声、泣き声、不自然な傷・あざあり	1	1	1	5	0	1
最近姿を見ない、物音がしない	1	1	1	6	1	2
不審者が出入り	0	2	0	—	3	4
無気力又は無表情、意欲・生氣なし	2	2	4	16	2	1
近所とのトラブルが多くなった	0	0	0	5	1	3
服装が以前より乱れている	0	4	2	10	0	1
火の不始末が増えている	0	1	0	3	10	2
会話が通じにくい	5	2	2	24	1	2

表 2-2 生活の様子で「はい」と答えた人数(見守り専従の有無別)

項 目	平成22年度		平成21年度	
	見守り専従なし (n=45)	見守り専従あり (n=58)	見守り専従なし (n=184)	見守り専従あり (n=150)
ポストの郵便・新聞、雨戸閉まりっぱなし	0	2	10	4
家や家周囲の散らかり	1	1	17	6
家の明かりがつかない	0	1	6	2
通院している様子が無い	0	0	13	3
どなり声、泣き声、不自然な傷・あざあり	0	2	5	1
最近姿を見ない、物音がしない	0	2	12	6
不審者が出入り	0	2	0	0
無気力又は無表情、意欲・生氣なし	1	3	10	7
近所とのトラブルが多くなった	0	0	6	1
服装が以前より乱れている	0	4	11	2
火の不始末が増えている	0	1	3	0
会話が通じにくい	3	4	33	8

「生活の様子」で「はい」と答えた人数は、表 2-1、表 2-2 のとおりであった。地域特性別でみると、平成 21 年度では、S 市に「はい」と答えた人が多かった。項目は、「会話が通じにくい」、「無気力又は無表情、意欲・生氣なし」が多かった。農村部では、「火の不始末が増えている」が最も多かった。平成 22 年度は、「会話が通じにくい」は都市部が多かった。

見守り専従の有無別では、平成 21 年度は、「はい」と答えた人数は、全ての項目で見守り専従なしの地域が多かった。「はい」と答えた人が特に多かった項目は、「会話が通じない」、「家や家周囲の散らかり」であった。平成 22 年度は、「はい」と答えた人数は、見守り専従ありの地域が多かった。「はい」と答えた人が多かった項目は、「会話が通じない」であった。

表 3-1 観察・会話による項目で「はい」と答えた人数(地域特性別)

項 目	平成22年度			平成21年度		
	都市部 (K市、S市 n=48)	都市近郊(n=55)	K市(n=111)	S市(n=97)	農村部 (n=44)	都市近郊 (n=82)
自分で家内を移動できない(杖、車椅子を含む)	0	3	1	9	0	0
転倒や事故などにあった	6	2	1	25	2	5
閉じこもり(外出週1回以下)	1	1	3	13	2	6
買物ができない	—	—	4	20	2	6
最近頼りになる家族の死(2ヶ月間)に遭遇	0	1	0	2	0	0
最近転居、長期入院から退院した	1	2	0	5	0	1
同居でも毎日本人は弁当購入	0	4	0	3	0	0
屋外に長時間一人でいる	0	1	0	4	0	3
食事が摂れていない	0	2	0	9	0	0
家事が出来てない	—	—	2	20	2	2
経済的に苦しい (収入なし、家族が失職・金銭搾取等されている)	—	—	1	5	1	3
必要な福祉サービスを中断・利用していない	4	0	2	17	1	3
家族との接触少ない (昼間独居、同居家族と必要最低限の会話)	3	2	2	19	5	4
正月3が日は誰とも過ごしていない、一人だった	6	8	2	9	0	8
眠れない、不安や心配事などがありますか	7	6	1	16	1	3

表 3-2 観察・会話による項目で「はい」と答えた人数(見守り専従の有無別)

項 目	平成22年度		平成21年度		計
	見守り専従なし (n=45)	見守り専従あり (n=55)	見守り専従なし (n=67)	見守り専従あり (n=23)	
自分で家内を移動できない(杖、車椅子を含む)	1	2	25	1	29
転倒や事故などにあった	5	3	17	5	30
閉じこもり(外出週1回以下)	0	2	25	7	34
買物ができない	—	—	9	3	12
最近頼りになる家族の死(2ヶ月間)に遭遇	1	0	6	0	7
最近転居、長期入院から退院した	2	1	3	1	7
同居でも毎日本人は弁当購入	0	4	3	0	7
屋外に長時間一人でいる	0	1	10	3	14
食事が摂れていない	0	2	18	0	20
家事が出来てない	—	—	9	4	13
経済的に苦しい (収入なし、家族が失職・金銭搾取等されている)	—	—	19	3	22
必要な福祉サービスを中断・利用していない	2	2	22	6	32
家族との接触少ない (昼間独居、同居家族と必要最低限の会話)	1	4	17	6	28
正月3が日は誰とも過ごしていない、一人だった	7	7	15	7	36
眠れない、不安や心配事などがありますか	4	9	10	3	26

「観察・会話」による項目について「はい」と答えた人数は、地域特性別では、平成 21 年度、S 市で多かった。特に多かった項目は、「転倒や事故などにあった」、であった。平成 22 年は、都市部(K 市、S 市)の方が多く項目は、「転倒や事故などにあった」、「必要な福祉サービスを中断・利用していない」であった(表 3-1)。

「観察・会話」による項目を見守り専従別でみると、平成 21 年度は、見守り専従なしの地域で各項目に「はい」と答えた人数が多かった。最も多かったのは、「転倒や事故などにあった」であった。平成 22 年度は、殆どの項目で「はい」と答えた人数が多かったのは、見守り専従ありの地域であった。「はい」と答えた人数が多かった項目は、「正月 3 が日は誰とも過ごしていない、一人だった」、「眠れない、不安や心配事がある」、「転倒や事故などにあった」であった(表 3-2)。

表 4-1 「認知症を疑うサイン」で「はい」と答えた人数(地域特性別)

項 目	平成22年度			平成21年度		
	都市部 (K市、S市 n=48)	都市近郊(n=55)	K市(n=111)	S市(n=97)	農村部 (n=44)	都市近郊 (n=82)
服装や髪の手入れにかまわなくなった	3	3	3	15	1	3
よく道に迷い帰宅できない、歩き回り不審がられ 鍵などの大事なものの置き忘れ、しまい忘れが目立つ	0	2	1	2	0	0
日時をよく間違え、約束を全く忘れて、ゴミの日をよく間違え	0	0	4	13	0	1
計算が出来ない(財布が小銭で一杯、札のみ支払う)	3	2	1	7	0	0
同じことを何度も言ったり、聞いたりする 話したばかりの内容を忘れる	—	—	4	22	1	3
通帳・財布などを盗まれたと騒ぐ	0	1	0	5	0	0
夜中に平気で外出・活動する 近隣のチャイムをよく鳴らす	0	1	4	45	3	7
ゴミの出し方が分からない ゴミの口がきっちり結べない	0	7	1	4	0	2
入浴を極端に嫌がる・身体の汚れが目立つ	—	—	1	5	1	0
同じ食品・品物を何度も買っている	1	6	0	5	0	0
怒りっぽくなった	—	—	0	7	0	0
薬の飲み忘れ、飲み過ぎが目立つ	1	6	1	13	0	0
腐ったものと新鮮なものとの区別がつかない	1	7	0	7	0	0
最近の出来事が思い出せない	0	2	2	16	0	3

「認知症を疑うサイン」で「はい」と答えた人数は、地域特性別では、平成 21 年度 S 市が多く、「最近の出来事が思い出せない」が最も多かった。平成 22 年度は、多くの項目で「はい」と答えた人数が多かったのは、都市近郊であった。「腐ったものと新鮮なものとの区別がつかない」に「はい」と答えた人が多かった(表 4-1)。

「認知症を疑うサイン」に「はい」と答えた人数は、見守り専従の有無別でみると、平成 21 年度は、見守り専従なしの地域で多く、項目では、「同じことを何度も言ったり聞いたりする、話したばかりの内容を忘れる」であった。平成 22 年度は、見守り専従ありの地域で「はい」と答えた人数が多かった。項目では、「薬の飲み忘れ、飲み過ぎが目立つ」、「ゴミの出し方がわからない、ゴミの口がきっちり結べない」、「同じ食品・品物を何度も買っている」が多かった(表 4-2)。

表 4-2 「認知症を疑うサイン」で「はい」と答えた人数(見守り専従の有無別)

項 目	平成22年度		平成21年度	
	見守り専従なし (n=45)	見守り専従あり (n=58)	見守り専従なし (n=184)	見守り専従あり (n=150)
服装や髪の手入れにかまわなくなった	3	3	6	16
よく道に迷い帰宅できない、歩き回り不審がられ 鍵などの大事なものの置き忘れ、しまい忘れが目立つ	0	2	1	2
日時をよく間違う、約束を全く忘れている、ゴミ の日をよく間違う	1	0	1	16
計算が出来ない(財布が小銭で一杯、札のみ 支払う)	0	0	5	13
同じことを何度も言ったり、聞いたりする 話したばかりの内容を忘れる	2	3	1	6
通帳・財布などを盗まれたと騒ぐ	—	—	7	23
夜中に平気で外出・活動する 近隣のチャイムをよく鳴らす	1	0	0	5
ゴミの出し方が分からない ゴミの口がきっちり結べない	1	0	8	—
入浴を極端に嫌がる・身体の汚れが目立つ	0	7	3	4
入浴を極端に嫌がる・身体の汚れが目立つ	—	—	1	6
同じ食品・品物を何度も買っている	1	6	0	5
怒りっぽくなった	—	—	0	6
薬の飲み忘れ、飲み過ぎが目立つ	1	7	1	13
腐ったものと新鮮なものの区別がつかない	0	2	0	6
最近の出来事が思い出せない	—	—	5	16

表 5-1 「うつ状態」の該当人数(地域特性別)

項 目	平成22年度			平成21年度		
	都市部 (K市、S市 n=48)	都市近郊(n=55)	K市(n=111)	S市(n=97)	農村部 (n=44)	都市近郊 (n=82)
毎日の生活が充実していますか :「いいえ」の該当者	4	6	3	19	1	3
これまで楽しんでやれていたことが今も楽しんでできていますか: 「いいえ」の該当者	4	3	3	21	1	4
以前は楽にできていたことが、今ではおっくに感じられますか : 「はい」の該当者	5	4	3	18	1	5
自分は役に立つ人間だと考えることができますか: 「いいえ」の該当者	7	3	2	14	0	4
わけもなく疲れたような感じがしますか:「はい」の該当者	4	5	2	16	0	4

表 5-2 「うつ状態」の該当項目(見守り専従の有無別)

項 目	平成22年度		平成21年度	
	見守り専従なし (n=45)	見守り専従あり (n=58)	見守り専従なし (n=184)	見守り専従あり (n=150)
毎日の生活が充実していますか:「いいえ」の該当者	4	6	21	6
これまで楽しんでやれていたことが今も楽しんでできていますか: 「いいえ」の該当者	4	3	10	7
以前は楽にできていたことが、今ではおっくに感じられますか: 「はい」の該当者	5	4	10	8
自分は役に立つ人間だと考えることができますか: 「いいえ」の該当者	4	6	8	6
わけもなく疲れたような感じがしますか:「はい」の該当者	5	4	15	6

「うつ状態」の該当人数は、地域特性別では、平成 21 年度 S 市が多く、平成 22 年度は、都市部(K 市、S

市)と都市近郊ともに該当人数がみられた(表 5-1)。

見守り専従の有無別では、平成 21 年度は、見守り専従なしの地域で該当人数が多かったが、平成 22 年度は、見守り専従の有無に関係なく該当人数がみられた(表 5-2)。

2) 見守りチェックリスト使用後の感想

(1) 対象者

見守りチェックリスト使用後アンケート協力者は、表 6-1、表 6-2 のとおりであった。

表 6-1 見守りチェックリスト使用後アンケート協力者の見守り専従の有無別人数と割合

		人数	パーセント
地域	都市部	58	47.9
	農村部	43	35.5
	都市近郊	20	16.5
	合計	121	100.0

表 6-2 見守りチェックリスト使用後アンケート協力者の見守り専従の有無別人数と割合

		人数	パーセント
見守り専従	見守り専従なし	58	47.9
	見守り専従あり	63	52.1
	合計	121	100.0

(2) 使いやすさ

表 7-1 チェックリストの使いやすさ(地域特性別)(n=121)

項目	地域特性別		思う	思わない	無回答	計
チェックリストは使いやすいと思うか	都市部 (n=58)	人数	50	7	1	58
		%	86.2	12.1	1.7	100.0
	農村部 (n=43)	人数	40	3	0	43
		%	93.0	7.0	0.0	100.0
	都市近郊 (n=20)	人数	14	3	3	20
		%	70.0	15.0	15.0	100.0
チェックリストの項目内容は適切と思うか	都市部 (n=58)	人数	49	7	2	58
		%	84.5	12.1	3.4	100.0
	農村部 (n=43)	人数	41	1	1	43
		%	95.3	2.3	2.3	100.0
	都市近郊 (n=20)	人数	16	4	0	20
		%	80.0	20.0	0.0	100.0

表 7-2 チェックリストの使いやすさ(見守り専従の有無別)

項目	見守り専従の有・無		思う	思わない	無回答	計	P値
チェックリストは使いやすいと思うか	見守り専従なし (n=58)	人数	50	7	1	58	0.02
		%	86.2	12.1	1.7	100.0	
	見守り専従あり (n=63)	人数	42	18	3	63	
		%	66.7	28.6	4.8	100.0	
チェックリストの項目内容は適切と思うか	見守り専従なし (n=58)	人数	49	7	2	58	0.01
		%	84.5	12.1	3.4	100.0	
	見守り専従あり (n=63)	人数	42	20	3	65	
		%	64.6	30.8	4.6	100.0	

「チェックリストは使いやすいと思うか」については、「使いやすいと思う」がどの地域でも 70%以上であった。見守り専従の有無別では、見守り専従なしの地域で「使いやすい」と答えた人が有意に多かった。

「チェックリストの内容は適切と思うか」については、地域特性別では、どの地域でも 80%以上であった。見守り専従の有無別では、見守り専従なしの地域で「適切と思う」と答えた人が有意に多かった(表 7-1、7-2)。

(3)役に立ったか

表 8-1 見守りチェックリストは役に立ったか(見守り専従の有無別)

項目	地域特性別		役に立った	役にた たな かった	無回答	計
自分たちが見守るべき対象を判断する基準として役に立ったか	都市部 (n=58)	人数	37	15	6	58
		%	63.8	25.9	10.3	100.0
	農村部 (n=43)	人数	42	1	0	43
		%	97.7	2.3	0.0	100.0
	都市近郊 (n=20)	人数	15	4	1	20
		%	75.0	20.0	5.0	100.0
専門職への連絡すべき基準として役に立ったか	都市部 (n=58)	人数	37	13	8	58
		%	63.8	22.4	13.8	100.0
	農村部 (n=43)	人数	41	1	1	43
		%	95.3	2.3	2.3	100.0
	都市近郊 (n=20)	人数	14	4	2	20
		%	70.0	20.0	10.0	100.0

表 8-2 見守りチェックリストは役に立ったか(見守り専従の有無別)(n=121)

項目	見守り専従の有・無		役に立 った	役にた たな かった	計	P値
自分たちが見守るべき対象を判断する基準として役に立ったか	見守り専従なし (n=56)	人数	50	6	56	0.061
		%	89.3	10.7	100.0	
	見守り専従あり (n=58)	人数	44	14	58	
		%	75.9	24.1	100.0	
専門職への連絡すべき基準として役に立ったか	見守り専従なし (n=55)	人数	49	6	55	0.124
		%	89.1	10.9	100.0	
	見守り専従あり (n=55)	人数	43	12	55	
		%	78.2	21.8	100.0	

「見守りチェックリストは自分たちが見守るべき対象を判断する基準として役に立ったか」については、「役に立った」と答えた人は、地域特性別では、農村部が最も多かった。見守り専従の有無別では、見守り専従ありの地域よりも、見守り専従なしの地域で「役に立った」と答えた人が多かった。

「専門職への連絡すべき基準として役に立ったか」について、「役に立った」と答えた人は、地域特性別では、農村部が最も多かった。見守り専従の有無別では、見守り専従なしの地域で「役に立った」と答えた人が多かった(表 8-1)(表 8-2)。

3. 組織育成研修プログラムの効果

1)対象者

表 1-1 「セルフ・ネグレクト(自己放任)」研修後アンケート協力者の地域別人数と割合

		人数	パーセント
地域	都市部	68	44.7
	農村部	48	31.6
	都市近郊	36	23.7
合計		152	100.0

表 1-2 「セルフ・ネグレクト(自己放任)」研修後アンケート協力者の見守り専従の有無別人数と割合

		人数	パーセント
見守り専従の有無	あり	106	69.7
	なし	46	30.3
合計		152	100.0

「セルフ・ネグレクト(自己放任)」研修後アンケート協力者の内訳は、地域特性別では、都市部が 68 人(44.7%)、農村部 48 人(31.6%)、都市近郊 36 人(23.7%)であった(表 1-1)。見守り専従の有無別では、見守り専従ありの地域 106 人(69.7%)、見守り専従なしの地域 46 人(30.3%)であった(表 1-2)。

表 2-1 「セルフ・ネグレクト(自己放任)」研修後アンケート協力者の性別(地域特性別)(n=152)

項目			男性	女性	無回答	計
対象者の性別	都市部 (n=68)	人数	6	60	2	68
		%	8.8	88.2	2.9	100.0
	農村部 (n=48)	人数	27	20	1	48
		%	56.3	41.7	2.1	100.0
	都市近郊 (n=36)	人数	11	25	0	36
		%	30.6	69.4	0.0	100.0

表 2-2 「セルフ・ネグレクト(自己放任)」研修後アンケート協力者の性別(見守り専従の有無別)(n=152)

項目		見守り専従の有・無	男性	女性	無回答	計
対象者の性別	見守り専従なし (n=46)	人数	23	22	1	46
		%	50.0	47.8	2.2	100.0
	見守り専従あり (n=106)	人数	21	83	2	106
		%	19.8	78.3	1.9	100.0

対象者の性別は、地域特性別では、農村部で男性が多く、都市部では、女性が 88%と多かった(表 2-1)。見守り専従の有無別では、見守り専従なしの地域で男性が多く、見守り専従ありの地域では、女性が 78%と多かった(表 2-2)。

表 3-1 「セルフ・ネグレクト(自己放任)」研修後アンケート協力者の年齢(地域特性別)(n=152)

項目		地域特性	~40歳代	50歳代	60歳代	70歳代	無回答	計
対象者の年齢	都市部 (n=68)	人数	1	7	33	22	5	68
		%	1.5	10.3	48.5	32.4	7.4	100.0
	農村部 (n=48)	人数	2	7	21	17	1	48
		%	4.2	14.6	43.8	35.4	2.1	100.0
	都市近郊 (n=36)	人数	4	4	17	8	3	36
		%	11.1	11.1	47.2	22.2	8.3	100.0

表 3-2 「セルフ・ネグレクト(自己放任)」研修後アンケート協力者の年齢(見守り専従の有無別)(n=152)

項目	見守り専従の有・無		～40歳代	50歳代	60歳代	70歳代	無回答	計
対象者の年齢	見守り専従なし (n=46)	人数	3	5	21	16	1	46
		%	6.5	10.9	45.7	34.8	2.2	100.0
	見守り専従あり (n=106)	人数	4	13	50	31	8	106
		%	3.8	12.3	47.2	29.2	7.5	100.0

「セルフ・ネグレクト(自己放任)という言葉または状態があることを知っていましたか」について、「知っていた」が最も多かったのは、都市部であった。「全く知らなかった」が最も多かったのは、都市近郊であった(表 3-1、3-2)。

表 4-1 セルフ・ネグレクト(自己放任)研修アンケート(地域特性別)(n=152)

項目	地域特性		知っていた	言葉は知っていたが状態は知らなかった	状態があることは知っていたが、想像できなかった	全く知らなかった	計
「セルフ・ネグレクト(自己放任)」という言葉または状態があることを知っていましたか	都市部 (n=66)	人数	21	22	12	11	66
		%	31.8	33.3	18.2	16.7	100.0
	農村部 (n=48)	人数	6	11	10	21	48
		%	12.5	22.9	20.8	43.8	100.0
都市近郊 (n=36)	人数	6	5	6	19	36	
	%	16.7	13.9	16.7	52.8	100.0	

項目	地域特性		よく感じていた	少し感じていた	あまり感じていなかった	全く感じていなかった	計
「セルフ・ネグレクト(自己放任)」状態にある人について見守りの必要性を感じていましたか	都市部 (n=64)	人数	21	34	7	2	64
		%	32.8	53.1	10.9	3.1	100.0
	農村部 (n=47)	人数	13	21	8	5	47
		%	27.7	44.7	17.0	10.6	100.0
都市近郊 (n=34)	人数	8	8	6	12	34	
	%	23.5	23.5	17.6	35.3	100.0	

項目	地域特性		よくわかった	まあわかった	あまりよくわからなかった	全くわからなかった	計
「セルフ・ネグレクト(自己放任)」とはどのような状態であるかわかりましたか	都市部 (n=67)	人数	38	27	1	1	67
		%	56.7	40.3	1.5	1.5	100.0
	農村部 (n=47)	人数	26	19	2	0	47
		%	55.3	40.4	4.3	0.0	100.0
都市近郊 (n=35)	人数	22	10	2	1	35	
	%	62.9	28.6	5.7	2.9	100.0	

項目	地域特性		考えることができた	まあ考えることができた	あまり考えることができなかった	全く考えることができなかった	計
シナリオの「友蔵さん」の気持ちについて考えることができましたか	都市部 (n=52)	人数	32	20	0	0	52
		%	61.5	38.5	0.0	0.0	100.0
	農村部 (n=47)	人数	26	19	2	0	47
		%	55.3	40.4	4.3	0.0	100.0
都市近郊 (n=35)	人数	22	11	1	1	35	
	%	62.9	31.4	2.9	2.9	100.0	

項目	地域特性		考えることができた	まあ考えることができた	あまり考えることができなかった	全く考えることができなかった	計
「セルフ・ネグレクト(自己放任)」状態にある人について見守りの必要性を感じましたか	都市部 (n=66)	人数	40	24	1	1	66
		%	60.6	36.4	1.5	1.5	100.0
	農村部 (n=48)	人数	40	8	0	0	48
		%	83.3	16.7	0.0	0.0	100.0
都市近郊 (n=34)	人数	25	8	0	1	34	
	%	73.5	23.5	0.0	2.9	100.0	

表 4-2 セルフ・ネグレクト(自己放任)研修アンケート結果(見守り専従の有無別)(n=152)

項目	見守り専従の有・無		知っていた	言葉は知っていたが状態は知らなかった	状態があることは知っていたが、想像できなかった	全く知らなかった	計
「セルフ・ネグレクト(自己放任)」という言葉または状態があることを知っていましたか	見守り専従なし (n=46)	人数	6	11	11	18	46
		%	13.0	23.9	23.9	39.1	100.0
	見守り専従あり (n=104)	人数	27	27	17	33	104
		%	26.0	26.0	16.3	31.7	100.0
項目	見守り専従の有・無		よく感じていた	少し感じていた	あまり感じていなかった	全く感じていなかった	計
「セルフ・ネグレクト(自己放任)」状態にある人について見守りの必要性を感じていましたか	見守り専従なし (n=45)	人数	11	20	10	4	45
		%	24.4	44.4	22.2	8.9	100.0
	見守り専従あり (n=100)	人数	31	43	11	15	100
		%	31.0	43.0	11.0	15.0	100.0
項目	見守り専従の有・無		よくわかった	まあわかった	あまりよくわからなかった	全くわからなかった	計
「セルフ・ネグレクト(自己放任)」とはどのような状態であるかわかりましたか	見守り専従なし (n=44)	人数	22	18	4	0	44
		%	50.0	40.9	9.1	0.0	100.0
	見守り専従あり (n=105)	人数	64	38	1	2	105
		%	61.0	36.2	1.0	1.9	100.0
項目	見守り専従の有・無		考えることができた	まあ考えることができた	あまり考えることができなかった	全く考えることができなかった	計
シナリオの「友蔵さん」の気持ちについて考えることができましたか	見守り専従なし (n=44)	人数	24	17	3	0	44
		%	54.5	38.6	6.8	0.0	100.0
	見守り専従あり (n=90)	人数	56	33	0	1	90
		%	62.2	36.7	0.0	1.1	100.0
項目	見守り専従の有・無		考えることができた	まあ考えることができた	あまり考えることができなかった	全く考えることができなかった	計
「セルフ・ネグレクト(自己放任)」状態にある人について見守りの必要性を感じましたか	見守り専従なし (n=45)	人数	35	10	0	0	45
		%	77.8	22.2	0.0	0.0	100.0
	見守り専従あり (n=103)	人数	70	30	1	2	103
		%	68.0	29.1	1.0	1.9	100.0

「セルフ・ネグレクト(自己放任)状態にある人について見守りの必要性を感じていましたか」については、「よく感じていた」、「少し感じていた」が最も多かったのは、都市部であった。

「セルフ・ネグレクト(自己放任)とはどのような状態であるかわかりましたか」については、全ての地域で「よくわかった」「まあわかった」が90%を超えていた。「シナリオの『友蔵さん』の気持ちについて考えることができましたか」については、「考えることができた」、「まあ考えることができた」は全ての地域で90%を超えていた。「セルフ・ネグレクト(自己放任)状態にある人について見守りの必要性を感じましたか」については、「よく感じた」が最も多かったのは、農村部であった(表4-1)。

「セルフ・ネグレクト(自己放任)という言葉または状態があることを知っていましたか」について、「知っていた」が多かったのは、見守り専従ありの地域であった。「全く知らなかった」は、見守り専従なしの地域であった。

「セルフ・ネグレクト(自己放任)状態にある人について見守りの必要性を感じていましたか」については、「よく感じていた」、「少し感じていた」が多かったのは、見守り専従ありの地域であった。

「セルフ・ネグレクト(自己放任)とはどのような状態であるかわかりましたか」については、双方で「よくわかった」「まあわかった」が90%を超えていた。「シナリオの『友蔵さん』の気持ちについて考えることができましたか」については、「考えることができた」、「まあ考えることができた」は双方で90%を超えていた。「セルフ・ネグレクト(自己放任)状態にある人について見守りの必要性を感じましたか」については、双方で「よく感じた」95%を超えていた(表4-2)。

Ⅱ 考察

1. 見守り組織体制の状況

1)見守り対象者

見守り対象者の状態は、都市部では、一人暮らしが多く、都市近郊では、身体の不自由を抱えているため、移動に杖や車椅子が必要で、事故や転倒の危険のある対象者が多かった。また、認知機能が低下している、うつ状態と考えられる対象者がみられた。人との交流では、「正月 3 が日は誰も過ごしていない、一人だった」見守り対象者数が増加傾向にあった。緊急連絡先については、都市部と都市近郊で不明が多かった。緊急連絡先が「子ども」の割合が高いが、平成 21 年度に比べて平成 22 年度は無回答の割合が高くなった。これらのことから、親族間でも人間関係の希薄化が進んでいる可能性がある。そのため、交流会等事業参加によって、孤独感の緩和や人とのつながりを感じることができるよう、交流会の場に参加を促すことが必要と考える。

2)見守り組織体制の状況

地域特性に関係なく、地域への愛着、互酬性の規範、近隣との信頼感の築きやすさは高い割合であった。都市部や都市近郊では、近隣と協力した見守り活動等を通して、近隣との付き合いを深め、信頼感を築いていくと考えられる。農村部では、互助的なつながりを土台に近隣への信頼感や互酬性の規範を築いていると考えられる。

見守り活動については、住民見守りは、外からの緩やかに見守り、「外で見かける」、「挨拶や普段の会話」からはわかる範囲での見守り活動が行われていることがわかった。住民見守りが可能な範囲として、都市部や農村部では、マンション等同じ敷地内、都市近郊では、同じ町内と考えていることがわかった。

見守り方法については、都市部では、一人暮らし高齢者が多く、身体の不自由を抱える人がいることから、平成 20 年度の調査結果と同様に、7 日以内に 1 回訪問する割合が高くなっていた。

見守りに対する気持ちについては、都市部や都市近郊に比べて農村部で 2 年前と現在双方ともに、「見守りは必要ない」と考えている人の割合が高い傾向にあった。これは、前年度インタビューデータ等から、「高齢者は家族で見るのが当たり前」との意識があることが関係していると考えられる。見守りボランティアが高齢化し、隣家との間隔が広く遠い中で見守り活動を行うことは、負担が大きいとされる。そのため、農村部では、見守り拒否や見守り対象者の経済的問題解決のために、地域の連携や協体制づくり、見守り活動が大切と考えていることがうかがえる。都市近郊では、見守り拒否や認知症・精神障害による生活障害に対する相談活動や孤立を防ぐ交流会の開催が必要と考えていた。都市部では、一人暮らしで周囲から孤立している高齢者に対して、人との交流を促す必要性を感じており、相談活動や交流の場の開催が大切であると考えている。

見守り専従の有無別では、見守り専従なしの地域では、同じ町内で見守り範囲と考えていた。見守り活動としては、サービス導入拒否や見守り拒否、経済的問題や認知症による生活障害を抱える対象者の実態を把握し、関係機関と連携して相談活動を行い、対象者の孤立を防ぐ交流の場を開催する必要があると考えていた。見守り専従ありの地域では、見守り対象者の見守り活動に加えて、保健・医療・福祉の情報提供や震災の経験から、災害時の対応が住民見守りネットワークを充実させるために必要と考えていた。見守り専従によって、地域見守り組織と見守り専従者等の専門職が、「顔見知りになる」、「お互いの役割がわかる」、「協働できる」の3段階で地域見守りネットワークを構築してきたことから、見守り活動の活性化につながったと考える。

2. 見守りチェックリストの有効性

全体的に、見守りチェックリストは見守りを行う際に有効と考える人の割合が高かった。見守りチェックリストは、見守りを行う判断基準および住民見守りの責任範囲について検討する機械となったことから、有効であったと考える。

項目については、平成 21 年度は基本編「生活の様子」で1つでも「はい」に○がついた場合、「観察・会話」、「うつ状態」、「認知症」の項目をチェックする内容であったが、平成 22 年度は、項目を整理し、全ての項目をチェックするよう変更した。基本編「生活の様子」で全てを把握することは難しい。そのため、多角的な視点から把握を試みた平成 22 年度の見守りチェックリストは、使いやすさ、内容の適切さ、判断基準としてより有効になったと考える。

地域特性別では、農村部では、他の地域に比べて、見守りチェックリストの使いやすさ、内容の適切さ、判断基準として有効と考える人の割合が高かった。このことから、農村部では、見守りボランティアの高齢化により、広範囲にわたる見守り活動の限界に対して、見落としなく、ポイントをおさえることができるツールとして有用であったと考えられる。都市部・都市近郊では、外や玄関先から観察可能な項目(認知症を疑うサイン、会話等コミュニケーションに関する項目、人との交流)については、把握されていたが、信頼関係を築かないと観察できない項目(食事や家事、経済状態、移動手段、緊急連絡先等)については、把握することは困難であることがわかった。また、認知症については、研修等を通じて、教育を受けている見守り組織メンバーが多く、認知症に関する観察項目は、把握しやすいと考えられる。

見守り専従の有無別では、見守り専従なしの地域では、見守り専従ありの地域に比べて「見守りチェックリストの使いやすい」、「内容が適切である」、「自分たちが見守るべき判断基準として役にたった」と答えた人は、有意に多かった。見守り専従ありの地域では、日ごろから、見守り専従との交流をとおして見守り判断基準について学ぶ機会を持っている。しかし、見守り専従なしの地域では、見守り判断基準を学ぶ機会が少ないため、見守りチェックリストは、役に立ったと考える。

見守り専従ありの地域では、住民見守り組織メンバーと見守り専従の役割が明確であるため、住民見守り組織メンバーの役割に合わせた見守りチェックリスト内容とする必要がある。具体的には、日常の見守り活動では、外からの見守りで把握できる認知機能や生活障害、コミュニケーション、人との交流に関する項目とする。また、新規転入者や家族形態の変化、日頃の見守り上変化に気づいた場合は、詳細についても把握できる項目を用いる。日頃用の見守りチェックリストと詳細を把握するための見守りチェックリストの 2 段階の使用方法を検討することは、見守り組織メンバーの交代や経験年数に対応するために必要であると考えられる。

3. 組織育成研修プログラムの効果

全体的に、研修を通して、「セルフ・ネグレクト(自己放任)」の状態、見守りの必要性を理解することができた。シナリオ劇をとおして、「セルフ・ネグレクト(自己放任)」状態の人の見守り方法について考えたことを地域見守り組織メンバーの見守り活動実践力育成につなげており、研修効果と考える。

地域特性別では、都市部で、セルフ・ネグレクト(自己放任)事例が身近に存在し、他の地域に比べて、見守りの必要性を感じている。

見守り専従の有無別では、見守り専従ありの地域で、「セルフ・ネグレクト(自己放任)」について「知っていた」人の割合が高かった。そのため、シナリオ劇の事例をとおして「セルフ・ネグレクト(自己放任)」の人の気持ちをより深く考えることができたと考えられる。しかし、「セルフ・ネグレクト(自己放任)」状態にある人について見守りの必要性を感じている人の割合は、見守り専従なしの地域で高かった。この

理由として、研修参加者は、見守り専従なしの地域で男性が多かったことから、より身近なこととして感じられたと考える。一方、見守り専従ありの地域では、地域見守り組織メンバーによる見守りと専門職による見守りで重層的に見守りをを行っている。見守り拒否等支援困難なケースへの早期介入システムができていたためである。

研修を通して、住民見守りの限界に対し、見守り可能な範囲を意見交換し、活動を活性化させる内容と方法を考えることができた。このことから、都市部・見守り専従ありの地域では、近隣と協力した見守り活動を通して、生活面で協力のできる付き合いを深めることができた。このことから、組織育成研修プログラムは、地域見守り組織メンバーの活動を活性化につながり、効果的であった。

Ⅲ 結論

1. 見守り組織体制の変化

- ・ 対象者の属性では、都市部で一人暮らしが多く、都市近郊では身体不自由を抱え、歩行で移動できない人が多く、平成 20 年度より 7 日に 1 回の訪問による見守りが行われていた。
- ・ 農村部では、互助的な繋がりがあり、近隣への信頼感や互酬性の規範を培い、地域の幅広い人との交流を通して、見守り活動が行われているが、サービス導入拒否や本人の経済的問題など解決のために、見守り活動や連携・協力体制づくりが必要と考えていた。
- ・ 都市近郊では、見守り可能な範囲は、同じ町内と他の地域より広い範囲で、見守り拒否や認知症・精神障害の生活障害のケースへの相談活動や交流会の開催が必要と考えていた。
- ・ 見守り専従ありの地域では、見守り専従者と住民ボランティアの役割分担が明確にされているため、住民は、普段の声かけや外出時に様子を伺う安否確認など、「おせっかい」「緩やかな見守り」の役割を担っていると考えられる。
- ・ 見守り専従ありの地域では見守り拒否や認知症・精神障害の生活障害の事例に対する見守りの必要性を感じており、必要時即応に介入可能な情報提供・相談を日頃の活動を通して構築しておく必要がある。

2. 見守りチェックリストの有効性

- ・ 全体的に、見守りチェックリストの有効性を感じている人の割合が高かった。
- ・ 都市部では、見守りの独自の判断基準作成がされている地域があるため、今回のチェックリストの有効性を感じない人が多かったのではないかと考える。
- ・ 隣の家との間隔が広く、距離のある農村部では、見守りチェックリストの使いやすさ、内容の適切さ、判断基準としての有効性を感じる人が多かった。
- ・ 見守り専従なしの地域では、見守り活動について相談する人がいないため、「見守りチェックリストが役に立つ」、「判断基準となった」と答えた人の割合が高かった。
- ・ 見守り専従ありでは、役割分担が明確化されているために、見守りチェックリストがなくとも、専門職との連携・協力体制づくりができていたためだと考える。

これらのことから、地域特性・見守り専従の有無に関わらず、見守りチェックリストは有効であると考えられる。

3. 組織育成研修プログラムの効果

- ・ 都市部ほど、セルフ・ネグレクト(自己放任)事例が身近に存在し、見守りの必要性を感じていた。
- ・ 農村部で、セルフ・ネグレクト(自己放任)事例への見守りの必要性を感じる人の割合が高かった。これは、農村部の研修参加者は男性が多いことから、用いた事例は男性の事例であったため、男性は、より身近なことと感ずることができたためと考える。
- ・ この研修によって、セルフ・ネグレクト(自己放任)への理解、見守りの必要性を感じている人が多く、研修でより理解を深めることができていた。
- ・ 研修を通して、セルフ・ネグレクト(自己放任)の見守りをより強く感じたのは、見守り専従なしの地域であった。

「セルフ・ネグレクト(自己放任)」状態の人の見守りの必要性を考える機会となったこと、見守り活動の実践力育成につながったことから、研修プログラムは有効であったと考える。

第3章 見守り組織参加ボランティアへの研修とグループインタビュー

既に研究方法で述べたが21,22年度の2年間引き続き協力を得られた各地区の見守り組織メンバー及び、関係する保健医療福祉職従事者を対象に、ほぼ同一内容の研修を2年間実施。この研修の参加者の内、見守り組織メンバーにグループ又は個別インタビューを実施。同意の得られた対象者の逐語録を作成。研修会では参加者が主体となって演じるシナリオ劇による「ドラマティック・リリーフ体験」とその後のグループワークでの意見交換等(p35 表 1、2)を行い、同意を得られた対象者からは、グループワークでの発言をICレコーダーで録音し逐語録を作成。録音に同意を得られなかった対象者、もしくは録音した音声聞き取りにくい場合には、議事録をもとに発言内容をまとめた。

さらに研修会終了後、研修参加者全員から『セルフ・ネグレクト(自己放任)研修アンケート』を記載・回収し、その中で「セルフ・ネグレクト状態の人を地域で支えていくにはどうするか」について自由記載により回答を得た。回答を記載していた者は、134名中53名であり、記載内容を一括(618単語使用)した。

今回の分析目的は、高齢者のセルフ・ネグレクト及び孤立死を防ぐための地域見守り組織のあり方について検討し、住民の主体的活動姿勢を引き出すことである。具体的目標は次の2つに絞った。

①セルフ・ネグレクト状態等の高齢者の早期把握のために求められている地域見守り組織のあり方(特に危機的状況に陥った本人及び介護者の早期発見の方法等)について検討する。

②セルフ・ネグレクト状態にある高齢者や周囲の者の状態(状況)を疑似体験することにより、より具体的に見守り活動(訪問等)の必要性や、地域でのネットワーク構築の必要性を検討することができる。

表1 研修会の構成

時間	内容
10分	オリエンテーション ミニレクチャー『セルフ・ネグレクトについて』
15分	ドラマティック・リリーフ体験
20分	グループワーク:話し合いと発表
15分	見守りチェックシート試用に際しての説明
5分	研修アンケート記載

表2 ドラマティック・リリーフ体験とグループワークの内容

<p>セルフ・ネグレクトをテーマとした、ドラマティック・リリーフ体験の紹介</p>	<p>主人公の友蔵さんは、妻に先立たれ 1 人暮らしをしている。息子夫婦は別居しており、時々電話してくれるが、友蔵さんは自分の気持ちをうまく伝えられない。</p> <p>囲碁教室に通ってみたが、周囲の人に馴染めず、最近はずっかり足が遠のいている。</p> <p>そんなある日、友蔵さん宅にセールスマンが訪ねてくる。最初は敬遠していた友蔵さんだったが、自分の話を一生懸命聴いてくれるセールスマンに親しみを感じ、商品購入の手続きをしてしまう。</p> <p>数日後、商品代金は引き落とされたが、商品は届かなかった。実は、セールスマンは詐欺師で、警察からも注意を呼びかけられていた人物だった。</p> <p>友蔵さんは、詐欺にあったことを誰にも言えず、ますます家に引きこもるようになった。</p> <p>3 ヶ月後、民生委員と見守りボランティアが友蔵さん宅を訪問してきた。暮らしぶりを尋ね、老人会を勧めてくれる二人にも、そっけない対応しかしない友蔵さん。</p> <p>友蔵さんの不潔な身なり・散らかった家の様子、『見知らぬ男が友蔵さん宅に入りしていた』という近所の人からの話に心配しながら、二人は帰っていく。</p> <p>* 研修参加者それぞれが、上記の登場人物の配役を決め演じる。配役に当たらなかった者は、観客としての立場で参加する。</p>
<p>グループワーク</p>	<p>①友蔵さんのどんなところが気になりましたか。(10分)</p> <p>②あなたが、以下の立場ならどのような対応をすればよかったですか。(10分)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・友蔵さん本人 ・息子夫婦 ・囲碁教室の仲間 ・近所の人 ・民生委員や見守りボランティア

I 結果

1. セルフ・ネグレクト状態にある人を地域で支えていくにはどうするか

1)見守りメンバー全体の意見・傾向

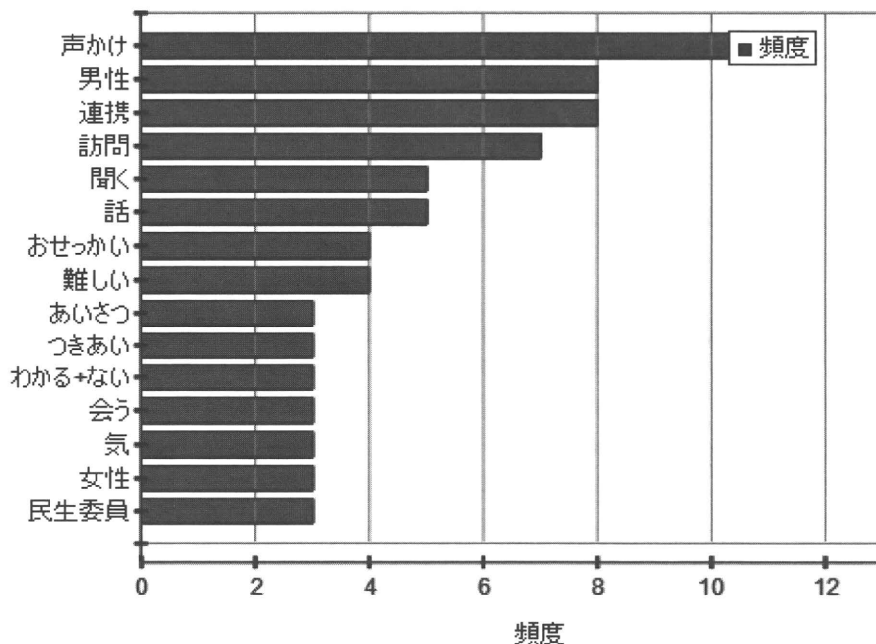


図1 単語頻度解析：全体 (n=134)

メンバー全体でみた場合、地域で支えていく上で、「声かけ」「連携」「訪問」「話」を「聞く」が必要であるとの回答が多く得られている(図1)。

「声かけ」では、「訪問」しての「声かけ」が一番望ましいとしながらも、「訪問」に応じてもらえない場合でも、外出先等での「声かけ」なら可能であるという意見が出された。

「男性」については、「一人暮らしの男性に、どんな声かけをしたらいいのかわからない」「プライドが高く、弱い面を見せないの、関わりに際しては配慮が必要」「自分の考えが強すぎる人が多いので、関わりをもつ際に注意が必要」など、見守る際に困難なこと、「男性は仲間作りが苦手、セルフ・ネグレクトが多い印象がある。退職後は趣味を作り、仲間を作っていく姿勢が大切」と、見守られる側が心がけておくことが挙げられている。

「連携」に関しては、近所の人・(見守り対象者の)家族・見守りボランティアのメンバー同士あるいはボランティア組織間・地域包括支援センター等行政との連携・協力が必要であると回答している。

「難しい」と感じられているのは、個人の生活に立ち入ること・セルフ・ネグレクトなのか単なる出不精なのか区別することであり、そのためチェックシートが必要であるとの意見が出されている。

「わからない(わかる+ない)」とされているのは、一人暮らし男性の生活の様子・地域の状況・セルフ・ネグレクトではないかと思った時の対応方法であった。

2)見守り専従の有無別にみた見守りメンバーの特徴

見守り専従の有無別での単語使用割合を図2に示した。

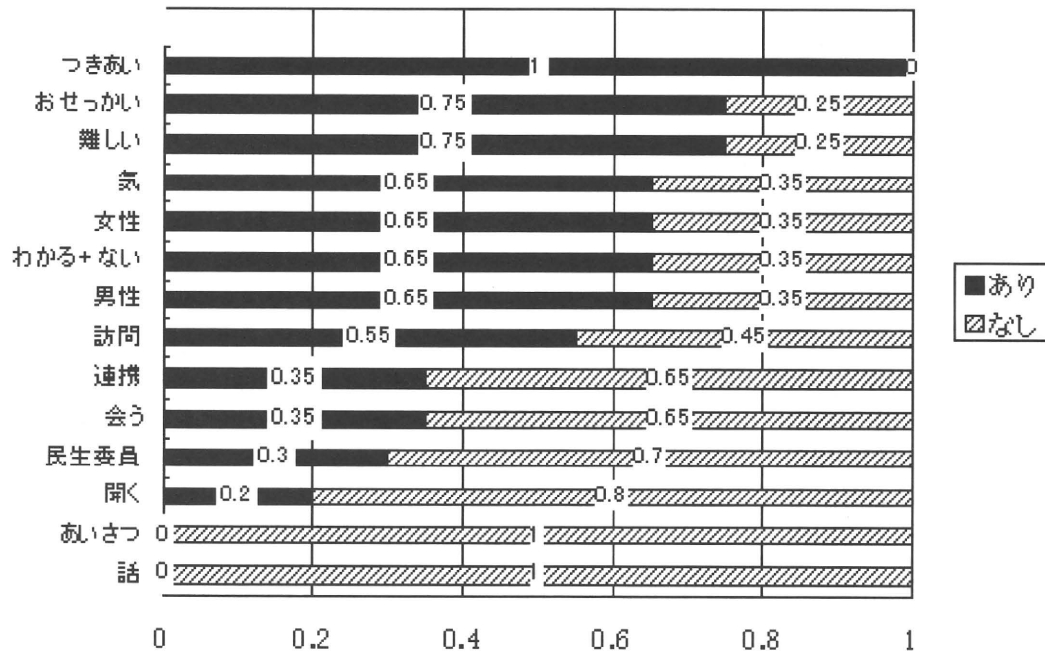


図2 単語頻度割合：専従有無別 (n=134)

【見守り専従がいる地区の特徴】

「つきあい」は見守り専従のいる地区でのみ発言されている。近所どうし、あるいは家族（別居している子ども等）との「つきあい」が必要であり、高齢になってからだけでなく、若いころからの近隣とのつきあいが必要であるという内容であった(図2)。

個人の生活に立ち入ることは「難しい」が、「おせっかい」でも繰り返し気長に「訪問」することで関係ができていくと考えられていた。「女性」と「男性」を比べると、「男性」はプライドが高く、仲間を作らず孤立している傾向があり、継続して「気」にかけていくことが必要であるという意見がみられた。

【見守り専従がいない地区の特徴】

「話」「あいさつ」は、見守り専従がいない地区でのみ発言されている。毎日の「あいさつ」や、外出時に「会ったら」ちょっとした「話」から関係作りを始めていくことが効果的であるとの意見が多く見られている。それは「つきあい」までの深い人間関係でなく、表面的な「あいさつ」「話」の範囲内での関わりを指している。

また、見守る側として、「民生委員」に期待が寄せられ、「民生委員が再教育や研修を受け、近隣者と連携をはかり、地域活かしていくことが課題」という発言が見られている(図2)。

2. ドラマティック・リリーフ体験後の話し合い

問.2-1 友蔵さんのどんなところが気になったか(友蔵さんをどんな人と思うか)

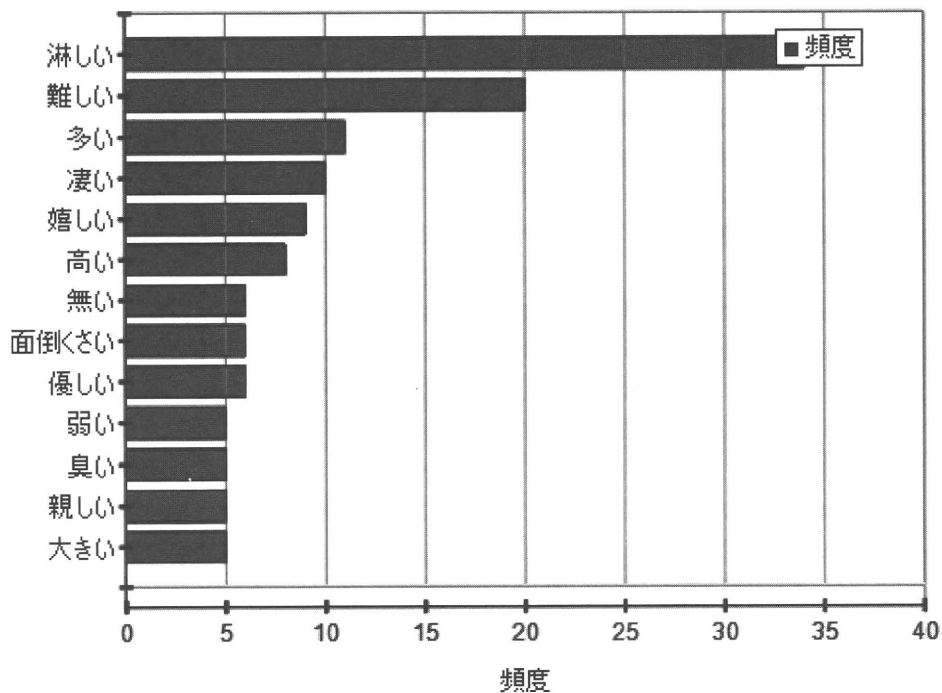


図3 単語頻度解析：全体 (n=134)

友蔵さんに対し、メンバーから挙げられた単語を以下にまとめた。

肯定的な面よりも、プライドが「高く」「面倒くさがり」で、話し相手もいない「淋しい」存在であり、関わり方が「難しい」と、否定的な面で捉えられていた。しかし、こういう男性は「多い」と身近なケースと重ね合わせながら決して特殊な事例ではないことが指摘されている(図1, 表3)。